

2019. 6. 1

畑 啓之

人口減少と孤独死、これが令和時代の潮流となっていくのか

「みんなぼっち」という言葉が若者の間で使われているようである。多くの人と付き合っているように見えても、感じ方は個々それぞれ。若者のみならず高齢者にも当てはまる言葉だろう。言いえて妙な表現である。

昨日の神戸新聞1面のトップ記事は、4段抜きで、

明石 老人ホーム90代孤独死 施設側2週間気付かず

そして今日は、同じく1面のトップ記事で、

兵庫県 死亡数 全市町で出生上回る

18年、都市部でも逆転 本格的な「多死社会」へ

(下の図を記事より引用)

「都市部でも逆転」というところに力が込められている。田園部においては、その傾向が顕著ということである。田舎では、買い物に行くにもマイカーが必要であり、車を所有しない場合には乗り合いタクシーで買い物に行くなどは、よくある光景となってきた。高齢化が進めばどの地域においてもこの傾向が出てくるだろう。

若者は便利な都会生活ということだが、その都市部においても生と死の逆転現象が起こった。これは通過点に過ぎない。たとえ、人口が減少したとしても、万人が幸せに過ごせる世にしていくことに重点が置かれるべきである。江戸時代の日本の人口は3千万人であったのだから、どこかでバランスすればよいのでは。GDPの大きさよりも一人ひとりの幸せが実現できる社会の在り様の方を望みます。

神戸新聞 6月1日

「みんなぼっち」なる語を若者言葉を集めた「辞書に載らない日本語」(大修館書店、2012年)で知った。やはり廃りが激しい言葉の世界だから、恐らくもう古いのかもしれない◆「友人同士でかたまっても、ほんとはみんな独りぼっちである」ということと恐ろしい。この通語が心に寂しく響くのは、「みんな」という明るい語感が「独り」の影をより一層、暗く映すからだろう◆きのうの朝刊に絶句した。「老人ホーム」と「孤独死」。どう考えても結びつかない二つの語句が、一つの見出しとなっている。明石市の介護付き有料老人ホームで、死後約2週間とみられる遺体が見つかった◆90代の入居男性だという。介護を必要とせずに自立していたが、体調が悪くお願いをしていた。安否確認はしかし、なされなかったらしい。男性は居家で倒れていた◆「みんな」とすれば「笑顔」、もしくは「元気」と結びたくなるように、「老人ホーム」と聞いてまず浮かぶ言葉は「安心」だろう。入居者も家族も「もしも」のときは頼りになる、そう信じているはずである◆いつからなのか、最近の国語辞典には「孤独死」の説明が載っている。つらくて、胸にこたえる現代用語だ。ちよちよ

